



JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Wednesday 11 May 2011 (morning)

Mercredi 11 mai 2011 (matin)

Miércoles 11 de mayo de 2011 (mañana)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.

INSTRUCCIONES DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.

次の1の文章と2の詩のうち、どちらか一つを選んでコメントリー(解説文)を書きなさい。

1.

この国では何ごともこだわるより、なりゆきに任せることが重んじられる。周到に準備されたもの、完璧に整えられたものは、たしかに感心されるにちがいないが、決して感動されることはない。なぜなら、周到に準備したり、完璧に整えたりすること自体がわずらわしく暑苦しい思いをさせるからである。

5 日本人が心から感動するのは、むしろ臨機応変に成しとげられたものであり、ありあわせのものである。ところが、これが難しい。周到に用意することは人の力によってできるが、なりゆきに任せるということは人の力だけでなく、それを超えるものの力が加わらなければできないからである。その二つの力が合わさったとき、そこには自在な間が生まれ、ほんとうによいものにめぐり会えたとしみじみと心を動かされるのだ。(中略)

10 何ごとにもこだわらないのがいいという日本人の感性はこの国の文芸にも深くしみこんでいる。なかでも連歌、それから生まれた連句はもつともこだわらない文芸である。どちらも数人の連衆が次々に句を詠みあい、つないでゆくのであるが、その際、いちばん大事なことは前の句に付きすぎないこと、つまり、こだわらないことである。

15 次の句を詠む人は直前の句とのあいだに十分な間をとらなくてはならない。さらに直前でなくてもすでに出た句と同じ趣向になってもいけない。誰かがそんな句を付ければ、たちまち停滞してしまう。連歌も連句もこだわらないことによって成り立つ文芸であり、こだわれば成り立たない文芸なのだ。

20 それがもつとも大事なものは恋の場面だろう。恋の句は二、三句つづいたら、その恋にくら未練があつてもさらりと捨てなければならぬ。芭蕉と去来と凡兆の師弟三人で巻いた歌仙「市中の巻」の終わり近くにこんな付け合いがある。

さまさまに品かはりたる恋をして 凡兆

うきよはて 芭蕉

なに故ぞ粥すゝるにも涙ぐみ 去来

25 凡兆の句はさまさまな身分のさまさまな女性との恋に明け暮れる在原業平か光源氏のよな人物を描く。それに対する芭蕉の句は恋の遍歴の果てに老いさらばえて諸国をさすらう小野小町。たとえ絶世の美女といっても最後はみなこんなありさまですというのだ。

30 さて、そのつづきはどうなるかと思えば、恋の付けあいはこちらでお願いします。次には粥をすすりながら涙ぐむ老残の人をいぶかしむ去来の恋離れの句がくるのだ。濃密な恋の一夜が明けて寒々とした霜の朝を迎えたような気分といえばいいだろうか。ここでもし去来が恋にこだわっていたら、この歌仙は停滞してしまい、べたべたとした暑苦しいものになつてしまつていただろう。

前の句にこだわらない、こだわってはいけない連歌や連句の形式を文章に應用すれば、随筆になる。『枕草子』も『徒然草』も長短さまざまな文章のかたまりを一行の空白によつてつないでゆく。前の文章とあとの文章は何か関連があつてもよいが、なくてもよい。

- 35 こだわる必要はないし、こだわってはいけない。こうして異なる話題の断章がいくつもつづき、しまいにはそれが互いに調和して『枕草子』や『徒然草』というひとつのまとまった本になる。

- 昔から日本では随筆が盛んに書かれ、名随筆が生まれ、随筆文学という分野まであるのは、随筆という形式がものにこだわるのをよしとしない日本人が古くからもつ感性にぴたりと合うからである。というよりも、随筆という形式自体、連歌や連句がそうだったように日本人の感性が生み出したものなのだ。

〔和の思想〕長谷川權 二〇〇九年

(注)

連歌・連句 上の句、下の句を異なる人が詠みあつて一つの和歌を作る。中世、近世に流行した詩形。

歌仙『市中の巻』 凡兆、芭蕉、去來の三人が連歌を詠みあい、作品を仕上げている。凡兆・去來は芭蕉の門人。いずれも江戸時代前期の代表的俳人。一六九一年俳諧集『猿蓑』を刊行。

2.

諸国の天女

諸国の天女は漁夫や獺人かりゅうじを夫として
いつも忘れ得ず想っている、
底なき天を翔かけた日を。

5
人の世のたつきのあわれないとなみ
やすむひまなきあした夕べに

わが忘れぬ喜びを人は知らない。

井の水を汲めばその中に

天の光がしたたっている

花咲けば花の中に

10
かの日の天の着物がそよぐ。

雨と風とがささやくあこがれ

わが子に唄えばそらんじて

何を意味するとか思うのだろう。

せめてぬるぬる春の波間に

15
ある日はかずきつ嘆なげかえば

涙はからき潮にまじり

空ははるかに金のひかり

あゝ遠い山々を過ぎ行く雲に

わが分身の乗りゆく姿

20
さあれかの水蒸気みどりの方へ

いつの日か去る日もあらば

いかに嘆かんわが人々は

きずなは地にあこがれは空に
うつくしい樹木にみちた岸边や谷間で
25 いつか年月のまにまに
冬過ぎ春来て諸国の天女も老いる。

(永瀬清子『諸国の天女』一九四〇年、現代仮名遣いに変更)

(注)

たつき 生計。生活の手段。

かずきつ 「かずきつつ」の意。ここでは「水中にくぐり入りながら」となる。